

第Ⅱ部

グループインタビュー

第1章 調査の概要

第1節 調査の目的

本インタビュー調査では、インフォーマントの非行に関する語りをデータとして抽出した。非行等の逸脱行動研究において重要だと考えられることに、非行の定義の問題がある。Beckerに代表されるレイベリング理論に依拠した研究によれば、逸脱行動は非逸脱行動と逸脱行動を分かち評価基準を前提として「成り立つ」ものだと考えられる。評価基準は一般に特定の集団のものであり、万人に公共的なものではない。したがって評価基準がかわれば行動の逸脱性もまたそれに伴って変化すると考えられる。このことは歴史的視座や交差文化的視座にたった場合、顕著に認められることである。ここではインフォーマント、つまり高校生のもつ評価基準が彼らの非行に関する語りに反映しているという想定のもと、彼らの発話を分析していく。教育、法執行の場面での評価者である「大人」の側の非行定義ではなく、青少年にとっての逸脱者、逸脱行動を読みとるという試みである。ここに必然的に現れうる評価基準のズレを意識することが、青少年の行動の原理を理解する助けになると考えられるからである。

また、評価基準は特定の集団に属すると上述したが、誰かを逸脱者であると評価する語りは、同時に、自分たちがなにものであるかを特定、表示する言説である。誰かをまたはある行動を逸脱的だと評価することは、自らの行動規範の間接的な表明であると解釈可能であろう。このことから、青少年のアイデンティティに関する議論が可能になると思われる。

以下、上述の相補う二点、つまり非行の定義と自己のアイデンティティの間接的表明という観点からインフォーマントの語りを分析していく。

第2節 調査の方法

第1項 調査対象者

首都圏の私立高校に在籍する女子高校生2名（グループ1）、公立高校に在籍する男子高校生3名（グループ2）の2グループ。

第2項 調査方法

インタビューによる調査を実施した。インタビューは、大学の研究室にて実施した。面接者は3名、面接対象者が2～3名で行われ、所要時間は1回1時間～1時間半であった。インタビューの状況は、面接対象者の了解のもとに、ビデオカメラによって記録された。

第3項 調査時期

平成11年2月の上旬から中旬にかけて、計2回のインタビューを実施した。

第2章 結果と考察

第1節 言説の運用により規定される「不良」

「不良」とは、一体何なのであろうか。どのような状態像をなして、不良という呼称が付与されるのであろうか。

先日亡くなった映画評論家の淀川長治は、映画館通いに明け暮れた自らの青春時代を振り返り、「私は、当時典型的な不良だった」という述懐を残している。また、作家の瀬戸内寂聴は、次のようにいっている。「私は古い文学観の最後の人間で、小説家が安穩な家庭を営んでいるなんてマユツバだと思っているんだから。だいたい小説家なんて、不良になるものなんですよ。」

このような記述を見ると、現状の不良観との甚だしい差異を読み取ることができる。数十年前は、今では驚きに値することが「不良」だったのである。

「不良少年」（桜井哲夫）によれば、不良概念の形成の契機は、19世紀の産業革命による都市部への若者層のよどみ、たまりという人口変化であった。ミッシェル・ペロは、この浮浪する若者は、アパッチ・針子などとして脅威の対象となっていたと述べている。しかし、不良概念形成の歴史的背景をみると、具体的な人口移動という変化以上に、言説の変化が不良を生産していることに気付く。

先述の産業革命期、すなわち1890年位から、大人たちは若者の管理・再教育を目ろむこととなり、子どもの規格（discipline）化がはじまる。ビネーの知能検査に代表されるように、アブノーマルな子どものあぶり出しが大々的に実施された。「正常」、「望ましい人間像」を提出することで、実にシステムティックに、規格外の子どもを検出する装置が考案されていったのである。このように、社会的に何が「正常」かを置くことにより、対照的な存在として「逸脱行動」や「不良」が必然的に設定されたのである。こうなると不良は所与のものではなく、社会的、文化的な不良評価視点と不可分な存在となってくる。不良とはそれを評価する人間、社会があってこそ存在するものなのである。そして、文化の差異こそが、不良概念の「差異」を顕在化させる。前述の現在の不良観との差異は、まさしくこの社会文化的地平から立ち上がってくるのである。

では、今回のインタビューでは、どのような評価基準をもって不良を不良たらしめているのだろうか。どのような存在を不良としているのであろうか。以下、実際の対話を紹介しながら検討していくが、最初に、興味深いこととして、「不良」概念の消失ともとれる対話を取り上げる。

《断片1-1. グループ1》

002 面接者2：非行なんて言葉、今使うのかな。

003 面接者1：わかんないね。

004 高校生1：テレビなんかで聞く。

005 面接者1：テレビで聞く。

006 面接者2：言葉としては当然知ってると思うんだけど。

- 007 面接者1：ズバリ学校にいます?非行少女。
008 高校生1：あたしらのクラスには...他のクラスにはいる、たまに。
009 面接者2：いる、たまに、それはどんな奴ですか?
010 高校生2：どんな...
011 高校生1：自分のクラスしか分からない。
012 高校生2：でもそんな、すごいわけではない。
013 面接者1：ちょっとそれをリストアップしてくれる。どういうことをすると不良になるのか。
014 高校生1：うちの学校そんなないないよね。
015 高校生2：あんまないい。

《断片1-2 グループ1》

- 072 面接者1：なんか呼び名はあるのかな。新聞だと非行少年とか非行少女とか不良とかいうけれども、そういう人たちをなんか呼び名がありますか?やばい人とか、怖い人とか、グレてるとか。
073 高校生1：呼び名は...ないと思いますよ。
074 高校生2：nod
075 面接者1：特に呼びあらかわす必要もないのかな。
076 高校生1：かわってんなとか。
077 面接者2：俺が高校生くらいのときはグレてるってのが流通していたような記憶があるんですけど。
078 面接者1：グレてるっていったた?
079 面接者2：うん。
080 面接者1：不良だよ。不良っていうよね、不良って。
081 高校生：(1~2秒の沈黙)
082 高校生1：中学の時は結構まとめて不良って...
083 面接者1：まとめて不良と。
084 面接者2：今はそういう呼び名はない...
085 高校生1：ないですね...
086 面接者2：そういう風に呼ぶ必要がないのかな、今は。

《断片2-1. グループ2》

- 018 面接者1：いきなり聞いときますけど、今、不良なんて言葉って使う?
019 高校生3：使わくない?
020 高校生1：使わない。
021 高校生2：うん。

- 022 高校生1：高校とかで全然使わくない？
- 023 面接者1：うちの頃、俺が高校生の頃は、不良なんて言えばすぐ通じたわけですよ。で、不良っていうふうに、見られる人たちがいたわけですよ。で、今そういう...イメージはわくよね?不良って聞いて。そういう人たちの呼び名なんてものはある？
- 024 高校生2：不良なんていう？
- 025 高校生1：いうかな。
- 026 面接者2：身の回りに...
- 027 高校生1：いや、言わないでしょ。
- 028 面接者2：身の回りにはいる?その、不良らしき人は。
- 029 高校生2：不良ってのが...
- 030 高校生3：どの...
- 031 高校生1：そう、どの範囲からか...
- 032 面接者1：あ、わかんないのか。
- 033 高校生1：バイク乗って、だから暴走族みたいなのが不良なのか、単に学校で金髪にしてるみたいなのが不良なのか、不良の境が。

《断片2-2. グループ2》

- 614 面接者3：男の子の場合で今やばい奴っていったじゃん、女の子の場合は?女の子の場合でこいつやばいんじゃないってのはいる？
- 615 高校生1：いますよね。
- 616 高校生2：違う意味でやばいよね。
- 617 面接者1：いる?どんな奴?
- 618 高校生1：もう、色黒で、ガン黒で、髪に超メッシュ入ってて、で、超ミニスカで、ルーズソックスはいてて、大体殆どそうだよ、やばいの
- 619 面接者3：ああ、それはもうやばいかなってカテゴリーに。
- 620 高校生2：やばいの意味違うんじゃない?
- 621 高校生1：でも、数人はいるよね。
- 622 面接者1：そういう子らに対してどう思う?率直に。
- 623 高校生1：やばい...

単純なネーミングの問題かもしれないが、高校生に「不良」という言葉は通じない。それどころか、断片1-1の対話にあるように、インフォーマントの生活枠においては、「非行」という言葉すら、木に竹を接ぐかのごとく不自然なものとして扱われている。断片1-2. 断片2-1.を参照すると、「不良」という言葉は歴史的な産物として、手触り感のない存在となっているようである。「やばい人」といった表現が高校生の間で有用されている表現方法であろうか。

さて、呼称の差異は存在すれど、高校生も、ある行動が逸脱行動であるか、非逸脱行動

であるかを判断する基軸を当然持っている。ある行動が逸脱行動として成立するには、その行動を逸脱と評価判定する基準が必要であるということは、先に確認した通りである。加えて、異なる集団は、互いに異なる事柄を逸脱と判定する。よって、「大人」が了解する逸脱者・逸脱行動と、高校生にとってのそれが一致しない場合は容易に推測される。評価基準が異なれば、すなわち、判定者が異なれば、追従する形で、どこまでが逸脱か、逸脱の基準・範囲が異なってくるのである。

今回のインタビューにおいても、高校生が定義する逸脱行動評価基準についての語りととられる対話が散見される。その一端として、インフォーマントが数多くストックしている、「やばい人」、すなわち逸脱行為者に関する伝聞物語に焦点を当てたい。その中には、自分が主人公であるストーリーはなく、フォークロアの類だけが存在している。武勇伝のように語られることはない訳だが、どのような状態を指して彼らのいう「やばい人」となりうるのか把握することができる。以下、高校生の逸脱観が読み取れる対話を紹介する。

《断片3 グループ2》

598 面接者3：学校の制服とかで区別する？

599 高校生3：する？

600 高校生1：俺しないな。学校の制服とかでは区別しませんね。3人くらいで、ロン毛で、茶髪とかだと、区別しますね。制服より、やっぱり、外見で。

601 面接者1：制服以外の、髪とか、眉毛とか。そんな人たちはどんなことしてる？

602 高校生1：大体バイク乗ってますね。

603 面接者1：他なんかある？知ってること。

604 高校生1あとタバコとかありますよね。

605 面接者1：君らタバコ吸うの？

606 高校生1：吸わない。

607 高校生3：吸わない。

608 高校生2：吸わない。

609 面接者1：友達とかでタバコ吸ってる人いるって言ってたよね、その人たちは別に悪い人じゃない、それとも悪い人になっちゃう？

610 高校生1：普通だよ。

611 面接者1：普通か。

612 高校生1：友達として普通です。

《断片4 グループ1》

064 高校生1：茶髪も...赤とか入ってたりすると、オレンジが入ってたりすると、近寄ってこない。

065 面接者1：それはなんかあの、音楽やってるとかそういうのじゃなくて、音楽やるた

めに、そのために特殊な髪型にする人もいるけれども、そうじゃなくて、やってるってことだよ。

066 面接者2：その人は一般的に言われている悪い奴らになっちゃう？

067 高校生1：あ、でも友達でもいますよ私は。

068 面接者2：普通に友達として付き合っている人。

069 高校生1：知り合い程度の人とか、駅でよく合う人とか、中学校からあがった友達がみんなそんな感じになってて。

070 面接者2：今は高校に行ってる。

071 高校生1：今はもうやめちゃって、高校もやめちゃってるような人だけ。

先述の通り、両グループの高校生との対話には、自分が実際になした逸脱行為のエピソードは登場しない。トピックとして提示されるのは、彼らの知り合いの逸話である。となると、高校生たちは、「友達でもいますよ」などの発話を通じて、自分をディスプレイするための言説を構築しているとは考えられないだろうか。「本当の自分」などというものは存在せず、言説だけが飛び交い、言説を操作しているのではなかろうか。インフォーマントが属している集団、すなわち高校生というカテゴリの範疇に存在する言説、それを我々インタビューアの質問に返すことから自分が何者であるかを提示しているのである。インフォーマントが、自分の存在する集団の言説を操作することで、結果としてインフォーマント自身の情報を提供している、と我々が見て取れるようになっているのである。

また、後に再度検討するが、グループ1の対話に「普通」という言葉が多く登場する。インタビューを受けた高校生たちは、エピソードとして提出される逸脱行為をなす高校生をも、生活空間を異にする存在として捉えてはいない。(タバコを吸う人とも)「普通に友達ですよ」、「中学からあがった友達がみんなそんな(茶髪etc.)感じになってて」といった発話から分かるように、悪しき存在、脅威の存在としては見ていない。自分との明確な境界線を設けてはいないのである。こうなると、「普通」の範囲の線引きが、過去のそれとは違っているということが推測される。今日の「普通」の高校生には、一昔前の「不良」の一部(もしくは大半)をも含んでいるようである。つまり、タバコやバイクくらいは「普通」だ、という解釈が流布しているのである。確信犯的な「不良」は趨勢を失いつつあるかもしれない。アンチ体制、アンチ権力といったような物語を構築せず、緩やかに「普通不良」であるという層が多いのではないだろうか。

インタビューアが不良をカテゴリ化するために用いる言説とは異なる語り、もしくは異なる用法を通して、高校生は、(一昔前でいう)不良を形作る。「誰か」の逸脱行為の言説を語ることにより、自分が存在する文化を構築しているのである。